犯罪のない「明るい社会」構築を目指して！
―私の保護司活動

八幡保護司会副会長・
折尾警察少年補導員副支部長
山本 敏明

［やまもと・としあき］北九州市消防局に40年間勤め、警防部長で退職。その間には、沖縄・洞爺湖サミット派遣、マレーシア災害派遣、阪神淡路大震災派遣、シリア・アラブ共和国消防技術指導派遣。趣味はバラ栽培と菓子作り。３年前からは弓道に精進。

保護司になったきっかけ

「保護司をさせて下さい！」と言って、保護司になったのは、55歳の時でした。その頃の私は、北九州市の消防署長として職員と共に、各種災害対応はもちろん火災予防行政にも力を入れ、安全で安心な地域づくりに励んでいました。

その様な折、ガソリンスタンドの経営者で非行歴のある子たちを雇う野口義弘氏とお話しする機会がありました。少年院を退院しても、働く場所がなければ再犯の可能性が高いのが現状です。野口氏は保護司をされている奥様からのお願いにより、その子等を雇用し、どんなに裏切られようと、我が子同様、物心に亘る支援をしていたのです。

その様なお話を聞き、ご夫妻の崇高な心に触れ、私の心が赤々と燃えるのを感じ、その気持ちのままに地域の保護司会事務所へ駆け込んだのです。保護司はどなたかから頼まれ渋々受けるのが殆どの様でしたので、私の飛び込み訪問に当時の責任者の方はびっくりしていました。そして、早や15年が過ぎ、現在では市内で一番大きな八幡保護司会で副会長をしております。

保護司の任務は？

皆さん、「保護司」って聞いたことはありますか。保護司は、非常勤の国家公務員で法務大臣から委嘱されたボランティアであり、全国には約5万人の方がおられます。ボランティアですのでもちろん給与はありませんが、やりがいは十分です。

現在の国内犯罪を見ると、連日のマスコミ報道では特殊詐欺や白昼堂々の強盗傷害事件、銃が絡む事件、親が子を殺し、子が親を殺す等々、これまでにない凶悪事件が頻発しています。そこには、悪い大人と騙される子供の構図も見え隠れしています。

犯罪や非行をした人（以下、「対象者」という）は、法律により罰せられ、状況によっては刑務所や少年院等で何らかの処分を受けた後、地域社会に戻って地域住民として普通の生活を行います。保護司は、その方々を地域の中で適切に処遇することにより、再び犯罪を起こさない様に、再び非行に走らない様に、立ち直りの手助けをします。

さらに、刑務所や少年院等に入っている方に対しては、適宜、面会に行き、激励や今後のことを話し合ったり、釈放後の社会復帰をスムースに行うため、住む場所を探したり、引受人である家族等との話し合い、就職先の確保など、様々な受け入れ態勢を整えることも大切な役目となっています。

日頃の活動として、対象者に対しては通常月2回の面接を行い、社会に対しては対象者の立ち直りについて理解を深めてもらうとともに、犯罪や非行のない社会を築くための「社会を明るくする運動」を行っています。

この運動では、地域での講演会や住民向けの啓発イベント、お祭りでのパトロール等も行っています。さらに、7月の強調月間には、区域内65校の小中学校の生徒さんたちにこの運動に対する作文のお願いをして

【写真右】地元商店街を練り歩きながら行う「社会を明るくする運動」
【写真左】中学校では先生たちと連絡会議を開く

います。生徒さんたちから頂いた作文では、それぞれに身近な問題から社会問題まで、犯罪や非行等について考えたことや感じたことなどが率直に書かれており、頼もしく感じています。

先日は中学校に出向いて、校長先生はじめ生活指導担当の先生たちと連絡会議を行い、お互いに顔の見えるお付き合いをしようと、非行少年の了解を得たうえでの情報の共有化や家庭環境の改善方策など、子供を守るための活発な意見交換を行いました。

これまでの活動で出会った方々

これまで15年間に亘り保護司をさせて頂き、中学生から年長の方まで、男女問わず、外国の方まで含めると約40名の方々を担当してきました。その中で特に印象に残っている方は、母子家庭で育ったA君です。

A君は恐喝や窃盗、無免許運転など道路交通法違反の繰り返しで処分となり、中学2年から保護期間満期の20歳になるまでの6年間私が担当しました。その間に3度も少年院に行くなど地域のワルそのものでした。私の孫と同じ年代だったことからやるせない気持ちもありました。面接では約束時間を守らず、自宅を訪問しても真っ暗でどこに行っているのか、母親への連絡も付かない状況に苛立ちを覚えたことさえありました。ようやく会えても、寝不足なのか欠伸(あくび)ばかりで話を聞こうともしない姿に、つい感情的になったことを覚えています。

面接中でも「今日はきついから早く終わって」や「これから友達と会うから」等、全く更生の姿勢が見えない状態でした。でもよく考えてみれば、まだ遊び盛りの中学生ですし、この年頃は兎に角、親に対して激しく反抗する時期でもあるのです。特に親の都合で勝手に離婚されたA君は、大切な時期に父親からの愛情が受けられない状況で育ってしまったのです。

ある時、A君の母親から「なぜこんな子になってしまったのでしょうか?」と尋ねられた私はすかさず「あなた達ご両親の責任ですよ」と答えました。人間は誰しも愛情が必要なのです。愛情さえ心一杯に満たされていれば、悪の入る余地はないのです。それは両親からの愛情だけではありません。昔は良き隣人であった、おせっかいな隣りのおばちゃんやおじちゃんの存在が希薄になっているのも、その要因かも知れません。

私はA君が心を開くにはどうすればよいのか悩みました。そして、まず自分が変わらなければならないことに気づいたのです。それからは、保護司ではあるものの人生の先輩として、時にはお父さんの代役として接することにしました。すると、少しずつですが、A君に変化が見えてきました。私は、お互いの信頼関係が最も大切ということをA君から教えられたような気がします。そのA君も、今では家庭を持って2人の子供の良きパパとなっていると風の便りに聞き、本当に嬉しく思いました。

また、別の例で、40歳過ぎの男性Bさんは、若干のうつ症状があり、浮気をした妻を殺めた方でした。お会いすると、とても大人しく物静かで、とても殺人を犯した方とは想像できませんでした。刑務所内にいる時は事件に対する反省の毎日で、亡くなった妻の冥福を心から祈るとともに、一人息子のことが心配だと言っていました。その子が公立高校に入学し、立派に育っていると聞き喜んでいました。Bさんも見事に更生し、今では一社会人として頑張っています。

外国人のCさんは、覚醒剤取締法違反でした。日本人の奥さんと娘さんがおり、私がお会いした時には子煩悩な良き父親でした。奥さんが出産のため実家に帰った時、孤独感から覚醒剤に手を出したということでした。外国から来ていた彼には、プライベートな悩みを打ち明けられる友人がいなかったようです。その後、専門プログラムを通して深く反省をし、絶対に再犯しないと奥さんに誓っていた姿が印象的でした。

笑顔の明るい20代のD子さんは、両親のもとで育ったものの、母親からの愛情が感じられず非行に走り、数年間に亘り薬物に手を出していました。当時の心境を聞くと、「悪いことだと分かっていても、深みに入ってしまった」らしく、「警察に捕まった時には、ホッとする気持ちもあった」と話してくれました。面接当初、長期間の薬物使用による激しい精神症状は見られなかったものの、

保護司記章

本人の完全な断薬を目指して専門病院や地域の保健福祉施設への橋渡しを行いました。今では運送業の助手として頑張りながら、時折、我が家に来てコーヒータイムを過ごし、明るい笑顔を見せてくれています。

保護司になるためには？

保護司になるために特別な資格はありませんから、過去に犯罪歴等が無ければどなたでもなれます。ただ、法務省のホームページには保護司の条件として、①人格や行動などに関して社会的な信頼や人望があること、②仕事をする時に精神的なゆとりや時間的なゆとりがあること、③安定的でバランスのとれた生活を送っていること、④健康面で問題がなく体力のゆとりがあること、と堅苦しい内容が記載されています。ですが、「心こそ大切なれ」と私は思っています。

現在、全国的に保護司を志す方が減少しています。実際、我が保護司会でも定数109名に対して実数77名となっています。保護司の役目は大変ですが、対象者といろんな場面で接する中で着実に更生への歩みを進められる姿を見ると、存外の充実感や「やってきて良かった」という心からの喜びを感じることができるのです。

私は保護司になりたての頃、友人等から「刑務所帰りの人は怖くないのか？」や「お前は良いかもしれないが、奥さんは大丈夫か？」など、いろんな激励（？）の言葉を頂きました。妻には保護司になる前から自身の思いを伝えてきたので、ある程度の理解は出来ていたと思います。とは言え、暴力団員風の方や凶悪犯罪の方を自宅に招く時には、かなり不安があった様です。その不安も一時で、今ではお茶を出す妻の笑顔で場が和むほどです（妻は地域の高齢者見守りグループで頑張っております）。

共に成長する!!

人間は誰しも、「善の心と悪の心」を持っているといいます。悪の心の奥には、弱い心（命）があるのではないでしょうか。悪い心が勝つかどうかは、自身の問題や他者との問題など、理性との闘いの中で、弱い心がどの様に現われてくるかの違いではないでしょうか。弱い心に負けないためには、日頃から心を充実させることが大切だと思います。保護司として私の最大の願いは、縁のあった方々が二度と過ちを起こさず、平凡で幸せな人生を歩んでくれることです。

私は保護司の活動を自身の「境涯（境遇）学校」と思っています。対象者は十人十色です。一人ひとり、生まれも育ちも性格も感情も全て異なります。当たり前ですが、一人として同じ人はいません。そして、何らかの罪は犯したものの、人間としての価値は備えているのです。

正直、「この人は苦手だな」と思った対象者の方のほうが多いです。それでも担当になって3か月が過ぎ、半年が過ぎていくと、その方の良さが見えてくるのです。私が苦手だなと思っているうちは、相手も同じように思っています。自分の狭い境涯で相手を見ていると、相手の本質は見えません。そう考えると、毎回、対象者の皆さんから私自身の方が境涯を開くように教えられているのです。

未来の宝を育む活動

私は、保護司の活動の他に警察署の依頼で、3年前から少年補導員をさせて頂いています。少年補導員の活動は「地域の少年は、地域で育てる」をモットーに、子供たちの登下校の見守りや地域でのお祭り、夜間のパトロール等を警察や地域の方々と連携しながら行っています。

保護司の活動は過ちを犯した後の対応ですが、少年補導員は犯罪を未然に防ぐことを主に青少年の育成などに心掛けています。パトロール中には時折暴言を吐く子供もいますが、我が子の様に、孫の様に愛情をもって接しています。その様な子は愛情に飢えているのです。生まれながらの非行少年はいません。非行の原因は環境や親の影響にあるのが大半です。子供は未来の宝です。保護司や少年補導員を通して、大切に育んでいきたいと思っています。

これからも、この素晴らしい保護司の活動を、誠心誠意続けて参る所存です。